

# 子どもが「にじ色」に輝けるように… ～にじっ子サポーターズの活動紹介～

にじっ子サポーターズ 共同代表 今井美栄子

高齢者や子どもの孤立を防ぐために、身近な地域の中で人々がつながりあうことができるようにと、認知症カフェや子ども食堂、子育てサロンなど市民による居場所づくりの活動が生まれています。どの活動も場所の確保が課題です。今回は、人とつながりあいながら元気に活動している「にじっ子サポーターズ」をご紹介します。

## 活動を始めたきっかけ

目黒区主催の「発達サポーター育星講座 基礎 b」（講師：星山麻木 明星大学教育学部教育学科教授）の受講生数人が、講座の最終日にLINE グループを作ったことから始まりました。そのLINE グループに付けた名前が「にじっ子サポーターズ」だったのです。

毎年大人気で抽選になるこの「育星講座」には、我が子の発達が気になる親、発達障害などを含む様々な要因で不登校になっているお子さんの親、そのような子どもたちの支援に興味がある人、などが集っています。

星山先生のお話は、いつも一つの信念に貫かれています。それは「人は生まれながらに誰もが『にじ色』。特性のない人などいない。学校に行きづらい子は、今の学校のやり方が合っていないだけ。自分に合った学び方をすれば、自分らしい生き方ができる。」というもの。その考えは毎回、「なんとか子どもを学校に合わせなくては!」と悩んでいる親の心をときほぐしてくれ、支援者の進むべき方向を示してくれます。

講座が終わった後も、語り合い、にじ色な子どもたちを認め合い、つながることで、何かいい方向に進めるのではないかと、そんな思いから「にじっ子サポーターズ」は始まりました。

## すべては「にじカフェ」から

いちばん最初の活動は、神奈川県藤沢市で活動しているNPO法人「優タウン」（旧・ホームスクーリングで輝くみらいタウンプロジェクト）を見学に行ったことでした。「優タウン」は、代表の方がお子さんの不登校をきっかけに立ち上げた団体で、「朝カフェ」という親のおしゃべ



り会を開催。そこで「にじっ子サポーターズ」でも真似をして、「にじカフェ」という名前で、不登校や発達障害のお子さんを持つ家族の会を開いていくことにしました。

やってみると、半年もしないうちに口コミでどんどん広がって参加人数が増え始め、1年後には一度に15人以上も集まるような時もあり、開催場所に困るほどでした。

各自が自己紹介をしておしゃべりするだけなのですが、みなさん子どもの状態や悩みについて堰を切ったように語られ（時には涙しながら…）、2時間で全員の自己紹介が終わりきらないこともしばしばでした。参加したみなさんが口々におっしゃったのは、次のようなことでした。

「子どもが不登校ではないママ友には話しくく、孤独だった。」「探しても目黒区には家族会がなかった。やっと出会えた!」「同じような境遇の人に、学校とのやりとりや、子どものその後の経過について聞きたかった。」「うちだけではないと分かり、少し気が楽になった。」

子どもが学校に行かなくなると、急に何も情報が入らなくなり、ママ友と話す機会も減ります。不登校が急増している今、どこの学校にも、あるいは同じクラスの中にも、不登校の子はいるかもしれないのに知り合うすべはありません。本来ヒトは一人で子育てはできないのに、完全なひとりぼっちになってしまう……その孤独と不安はいかばかりでしょう。

「にじカフェ」で話ただけで、我が子が明日から学校に行くわけではなく、現実は何も変わらないかもしれせん。にもかかわらず、「聞いてくれて、うれしかった。」と言って、少し明るい表情になって帰っていかれる姿を見て、「ただ話して聞くだけ」…そんな「親支援」こそがとても大切なのだと知りました。

## だんだん活動が広がって……

学校に行けなくなることには千差万別の理由があるようです。また、学校に行っても困っている子、それをうまく言えない子もいる、ということも、活動の中でいろいろなお子さんの話を聞いたり接したりしているうちに、わかってきました。

もしも取り除けるような理由だったら、少し配慮して欲しい。そう考えて、親が学校に要望をする場合、制度の壁に阻まれることがよくあります。どのようなことに困っているかを声に出して伝えることで、少しずつ「にじ色」の子ど



もそれぞれに対応した支援ができるようになってくれればと思います。そんな私たちの思いを知ってもらうため、社会福祉協議会や区議会議員の方々には、今まで何度か「にじカフェ」を見学に来ていただきました。

親たちのいちばんの望みは、家にいる子どもたちが外と関わりを持つこと。子どもそれぞれに合った、学校以外の「居場所」があること。のんびりしたい子は遠慮なくのんびりとでき、勉強したくなったら教えてくれる人がいて、年齢の近い友達や、少し年上の若者たちなど、親とは違う人と触れ合えること。

一昔前は地域に普通にあった、そんなゆるゆるとした空間が、仲間が、時間が、現代は失われています。今の子どもには、そんな「秘密基地」のような「逃げ場」がなく、生きづらさにもつながっているのではないのでしょうか。

親同士がつながることで、そのような場所が生み出せないかと、イベントも企画するようになりました。バーベキューや遠足、自由工作ごんまいの会、土いじり、音楽ワークショップ、ライブハウスを借りた音楽パフォーマンス会、などをやってきました。

引きこもりがちな子どもが一步を踏み出すのはそう簡単なことではなく、大人の思うようには行きませんが、時間をかければ少しずつ心を開いてくれる子もいます。地域のお店や学生ボランティアなどの手も借りて、今後も続けていきたいと思っています。

そして、親自身が楽しむことも大切ということにも気がつきました。親が暗い顔ばかりしていれば、子どもは「自分が心配をかけているせいだ」と感じ、家の雰囲気はますます悪くなりがちです。隠れた特技や趣味を生かした、親同士のワークショップなども開いています。

また、もともと「発達」に関する講座から生まれた「にじっ子サポーターズ」には、目黒区の小学校や中学校で「特別支援教育支援員」をやっている人も何人かいます。目黒区では有償ボランティアの立場ではありませんが、少しでも子どものためになる支援がしたいと、支援員同士で勉強会を開いたりもしています。

### こんな学校になったらいいな…

「にじっ子サポーターズ」で、「バイブル」となっている映画があります。今から10年前に制作された、大阪の公立小・大空小学校を舞台に撮られたドキュメンタリー映画『みんなの学校』です。今の学校教育に一石を投じる内容で、常に全国あちこちで自主上映されています。

この映画の中では、特別支援教育の対象となる子ども、自分の気持ちをうまくコントロールできない子ども、みんな同じ教室で学んでいます。児童と教職員だけでなく、保護者や地域の人もしっかりと一緒になって、誰もが通い続けることができる学校を作りあげています。

みんなが居られる教室は、みんなが安心できる教室。子どもたちの多様な色を受け入れてくれる教室。それなら不登校というものも、生まれないのではないかと。私たちはそんなふうを考えています。

### これから目指していきたいこと

目黒区で子育て支援活動が難しいことの大きな要因は、場所代が高いことです。どの団体も喉から手が出るほど、みんなが集える支援拠点が欲しいと思っています。ぜひ行政にはそこを助けていただき、官民連携で子どもたちにたくさん選択肢を提供していけるようにしていきたいです。

そして、子どもを真ん中にして大人みんなで見守り、子どもの声（大きい声だけでなく、小さい声も）をしっかりと聞きながら、学校や社会を作っていけたらと思います。



抽選に応募して区民農園を借り、協力して野菜を育てています(2022年10月)。土いじりで自然と触れ合うと、子どもも大人も心が開放されます



年1回開催の「音楽ワークショップと遊びのレストラン」で、来場した子どもたちが作った作品(2022年11月)。いろいろな素材をたくさん用意しておき、朝から夕方までやりたいことを自由にできる空間です



年2回開催の「にじっ子LIVE」(2023年3月)。老若男女、うまいへ夕関係なく、飛び入りで誰でも自由にパフォーマンスができます。目黒のライブハウス「楽屋」の昼間のスペースをお借りしています